

# 源氏物語

紅梅

紫式部

青空文庫



うぐひすも問はば問へかし紅梅の花の

あるじはのどやかに待つ  
(晶子)

今あ按察使ぜち大納言といわれている人は、故人になつた太政大臣の次男であつた。亡なき柏かしわぎ木の衛門督えもんのかみのすぐの弟である。子供のころから頭角を現わして、朗らかで派手はでなところのある人だつたため、月日とともに地位が進んで、今では自然に権力もできて世間の信望を負つていた。夫人は二人あつたが、初めからの妻は亡なくなつて、現在の夫人は最近までいた太政大臣の長女で、真ま木柱きばしらを離れて行くのに悲しんだ姫君を、式部卿しきぶきょうの宮家で、こ

れもお亡くなりになった。兵部卿ひょうぶきょうの宮と結婚をおさせになった人なのである。宮がお薨かくれになったあとで大納言が忍んで通うようになったが、年月のたつうちには夫婦として公然どうせいに同棲どうせいすることにもなった。子供は前の夫人から生まれた二人の娘だけであつたのを、寂しがって神仏にも祈つて今の夫人との間に一人の男の子を設けた。夫人は兵部卿の宮の形見の姫君を一人持つていたのである。隔てを置かずに夫婦は母の違つた娘と、父のない娘を愛撫あいぶしているのであつたが、そちらこちらの姫君付きの女房などの間にうるさい争いなどの起こる時もあるのを、夫人はきわめて明るい快活な性質であつたから、継ままむすめ娘のほうの女房の罪をつまびらかにしようとはせず、自身の娘のために不利なことも

そのまま荒だてずに済ますよう骨を折ったから、家庭はきわめて平和であった。

姫君たちが皆同じほど大人おとなになったから裳着もぎの式などを大納言は行なった。七間の寝殿を広く大きく造つて、南の座敷には大納言の長女、西のほうには二女、東の座敷には宮の姫君を住ませているのであった。ちよつと思つとこの姫君は心細い身の上のよう  
で気の毒だが、曾祖父そうそふの宮、祖父の太政大臣、父宮などの遺産の分配されたのが多くて、夫人は、高級の貴女の生活の様式をくずさず愛女をかしくことができ、奥ゆかしい佳人の存在と人から認められていた。妙齡の娘のある家の常で、大納言家へは求婚者が続々現われてきたし、宮中や東宮からお話があるようにもな

つたが、陛下のおそばには中宮ちゆうぐうがおいでになる、どんな人が出て行つてもその方と同じだけの御寵ちようあい愛あいが得られるわけもない、そう言つて身を卑下して後宮の一員に備わつていられるだけではつまらない、東宮には夕霧の左大臣の長女が侍していて、太子の寵もつぱを専らもつぱにしているのであるから、競争することは困難であつても、そんなふうにはばかり考えては、人にまさつた幸福を得させたいと思う女の子に宮仕えをさせるのを断念しなければならぬことになつて、未来の楽しみがいもなかつたことになるかと大納言は思つて、長女を東宮へ奉ることにした。年はもう十七、八で美しいはなやかな気のする姫君であつた。二女も近い年で、上品な澄みきつたような美は姉君にもまさつた人であつたから、普通の

人と結婚させることは惜しく、兵部卿の宮が求婚されたならばと、大納言はそんな望みを持つていた。大納言の一人息子むすこの若君を匂におおうみや宮は御所などでお見つけになる時があると、そばへお呼びになつてよくおかわいがりになつた。聡明そうめいらしいよい額つきをした子である。

「弟だけを見ていて満足ができないと大納言に言つてくれ」  
 などとお言いになるのを、そのまま父に話すと、大納言は笑顔えがを見せられてうれしそうにした。

「人にけおされるような宮仕えよりは兵部卿の宮などにこそ自信のある娘は差し上げるのがいいと私は思う。一所懸命におかしくすれば命も延びるような気のする宮様だから」

と言いなながらも大納言はまず長女を東宮の後宮へ入れる準備をして、春日かすがの神意どおりに藤原ふじわら氏の皇后を自分の代に出すことができて、父の大臣は院の女御にようしを后位の競争に失敗させ、苦い思いをしたままで亡なくなったのであるから、靈の慰むようにもなればいいと心の中では祈っていた。その人は間もなく太子宮きゆうへはいった。付き添いの女房から御寵ちようあい愛があるという報告が大納言へあつた。後宮の生活に馴なれないうちは親身の者が付いていなくてはといつて、真木柱夫人がいつしよに御所へ行つていた。優しいこの継母まはははよく世話をして周囲にも気を配ることを怠らないのであつた。

大納言家の内が急に寂しくなつた気がして、西の姫君などは始



終いつしよに暮らした姉妹きようだいなのであるから、物足らぬ寂しい  
思いをしていた。東の姫君も大納言の実子の姉妹とは親しく睦むつび  
合つてきたのであつて、夜分などは皆一つの寢室で休むことにし  
ていて、音楽の稽古けいこをはじめ、遊戯ごとにもいつも東の姫君を師  
のようにして習つたものである。東の女によおう王は非常な内気で、母  
の夫人にさえも顔を向けて話すことなどはなく、病氣と思われる  
ほどに恥ずかしがるところはあるが、性質が明るくて愛嬌あいきようの  
ある点はだれよりもすぐれていた。こんなふうには東宮へ長女を奉  
つたり、二女の将来の目算をしたりして、自身の娘にだけ力を入  
れているように見られぬかと大納言は恥じて、

「姫君にどういふふうな結婚をさせようという方針をきめて言つ

てください。二人の娘に変わらぬ尽力を私はするつもりなのだから」

と大納言は夫人に言ったのであるが、

「結婚などという人並みな空想をあの人に持つことはできませんほど弱い気質なのでございます、それで普通の計らいをしましてはかえつて不幸を招くことになると思いますから、運命に任せておくことにしまして、私の生きております間は手もとへ置くことにいたします。それから先は非常に心細く想像されますが、尼になるといふ道もあるので、その時にはもう自身の処置を誤らないだけになっていると思います」

などと夫人は泣きながら言つて、大納言の好意を謝していた。

東の姫君にも同じように父親らしくふるまっている大納言ではあつたが、どんな容貌ようぼうなのかを見たく思つて、

「いつもお隠れになるのは困つたことだ」

と恨みながら、人知れず見る機会をうかがっていたが、絶対に言つてもよいほど、姫君は影すらも継父に見せないのであつた。

「お母様の留守の間は私が代理になつて、どんな用の時にも私はこちらへ来るつもりなのだが、まだ親と認めないお扱いを受けるのに悲観みすされます」

などと、御簾みすの前にすわつて言っている時、姫君はほのかに返辞けはいくらいはしていた。声やら、気配けはいやらの品のよさに美しい容貌も想像される可憐かれんな人であつた。大納言は自分の娘たちをすぐれ

たものと見て慢心しているが、この人には劣っているかもしれない、だから世界の広いことは個人を安心させないことになる、類がないと思つていても、それ以上の価値の備わつたものが他にあることにもなるのであろうなどと思つて、いつそう好奇心が惹ひかれた。「ここ数月の間はなんとなく家の中がざわついていまして、あなたたの琴の音を長く聞くこともありませんでしたよ。西にいる人は琵琶びわの稽古けいこを熱心けんしんにしていますよ。上達する自信があるのですよ。うか。琵琶はまずく弾ひかれると我慢まんのならないものです。できますればよく教えてやってく下さい。この老人はどの芸芸といつて特に深く稽古けいこをしたものといつてはないのですが、昔の黄金時代に行なわれた音楽の遊びに参加しただけの功德で、すべての音楽を

通じて耳だけはよく発達しているのです。たくさんはお聞かせになりませんが、時々お聞きするあなたの琵琶の音にはよく昔のその時代を思い出させるものがありますよ。現在では六条院からお譲りになった芸で、左大臣だけが名手として残しておいでになります。が、薫中納言、匂宮の若いお二人はすべての点で昔の盛り御代みよの人に劣らないと思われる天才的な人たちで、熱心におやりになる音楽のほうで言えば、宮様の撥音ばちおとの少し弱い点は六条院に及ばぬところであると私は思っているのです。ところがあなたのは非常に院のお撥音に似ています。琵琶は絃いとのおさえ方の確かなのがよいということになっていますが、柱じをさす間だけ撥音の変わる時の艶な響きは女の弾き手のみが現わしうるもので、かえ

つて女の名手の琵琶のほうを私はおもしろく思いますよ。今からお弾きになりませんか。女房たち、お樂器を」

と大納言は言った。女房らは大納言に対してあまり隠れようとはしないのであるが、若い高級の女房の一人で、顔を見せたがらないのが、じつとして動かないのを大納言は、

「お付きの人たちさえも私を他人扱いするのがくやしい」  
と腹をたてて見せたりもした。

若君が御所へ上がるうとして直衣姿のうしで父の所へ来た。正装をしてみずらを結った形よりも美しく見える子を、大納言は非常にかわいく思うふうであつた。夫人も行っている麗景殿れいげいでんへすることづてを大納言はするのであつた。

「お任せしておいて、今夜も私は失礼するだろうと思う、と言うのだよ。気分が少し悪いからと申してくれ」

と言ったあとで、

「笛を少し吹け、何かというと御前の音楽の集まりにお呼ばれるではないか。困るね。幼稚な芸のものを」

微笑をしながらこう言つて、双調を子に吹かせた。一人息子がおもしろく笛を吹き出すのを待っていて、

「悪くはなくなつてゆくのも、こちらのお姉様の所で、自然合わせさせていただくことになるからだろうね。ぜひただ今も掻かき合あわせてやつてください」

と責められて、女王は困っているふうであつたが、爪つま弾びきで琵琶

琵琶をよく合うように少し鳴らした。大納言は口笛で上手じょうずな拍子をとるのだった。この座敷の東の側に沿って、軒に近く立った紅梅の美しく咲いたのを大納言は見つて、

「こちらの梅はことによい。ひょうぶきよう兵部卿の宮は宮中においてになるだろうから、一枝折らせてお持ちするがいい。『知る人ぞ知る』

(色をも香をも)」

こう子供に言いながらまた、大納言は、

「光源氏がいわゆる盛りの大将でいられた時代に、子供でちょうどこの子のようにして始終お近づきしたことが今でも私には恋しくてなりません。この宮がたを世間の人はお褒ほめするし、實際愛さるべく作られて来た人のような風采ふうさいはお持ちになります、



光源氏の片端の片端にもお当たりにならないように私の思うのは、すばらしいと子供心にお見上げたころの深い印象によるものなのかも知れません。われわれでさえ院をお思い出しするとお別れしたことは慰みようもない悲しみになるのですから、家族の方がたでお死に別れをしたあとに生き残らねばならなかつた人たちは不幸な宿命を負っているのだという気がします」

こんなことを女王に語つて、大納言は深く身にしむふうでおれかえつてしまった。この気持ち促しもして大納言は、梅の枝を折らせるとすぐに若君を御所へ上がらせることにした。

「しかたがない。阿難あなんが身体からだから光を放つた時に、釈迦しゃかがもう一度出現されたと解釈した生賢なまい僧があつたということだから、院

を悲しむ心の慰めにはせめて匂宮へでも消息を奉ることだ」

と言つて、

心ありて風の匂にほはす園の梅にまづ鶯うぐひすの訪とはずやあるべき

この歌を紅の紙に、青年らしい書きようにしたためたのを、若君の懐ふところ紙がみの中へはさんで行かせるのを、少年は親しみたく思う宮であつたから、喜んで御所へ急いだ。

兵部卿の宮が中宮のお宿直座敷とのいから御自身の曹司ぞうしのほうへ行こうとしていられるところへ按察使あぜち大納言家の若君は来た。殿上役人がおおぜいあとからお供して来た中へ混じつて来た子供を、宮

はお見つけになつて、

「昨日きのうはなぜ早く退出したの、今日きょうはいつごろから来ていた」

などとお尋ねになつた。

「昨日はあまり早く退さがりましたのが残念だったものですから、まだ宮様が御所にいらつしやると人が言うものですから、急いで」

子供らしくはあるが、若君は親しい調子で申し上げた。

「御所でなくても時々はもつと気楽な家のほうへも遊びに来るがいいよ。若い人がどこからともなくたくさん集まって来る所だよ」

と宮はお言いになる。この子一人を相手にお話をあそばされるので、他の人たちは遠慮をしてやや遠くへのいたり、ほかへ行つてしまつたりして、静かになつた時に、宮が、

「東宮様から少し暇がいただけただけだね、君をおかわいがりになつてお放しにならないようだったのに、私の所へ来ている間に御ちようあい寵愛を人に奪われては恥だろう」

とおからかいになると、

「あまりおまつわりになるので苦しくてなりませんでした。あなた様は」

と子供は言いさして黙ってしまったのをまた宮はじようだん冗談にし  
て、

「私を貧弱な無勢力なものだと思つて、嫌きらいになつたつて、そんなの。もつともだけれど少しくちおしいね。昔の宮様のお嬢様で、東の姫君という方にね私を愛してくださらないかつて、そつとお

話ししてくれないか」

こんなことをお言いだしになったのをきっかけにして、若君は紅梅の枝を差し上げた。

「私の意志を通じたあとでこれがもらえたのならよかつたろう」とお言いになって、宮は珍重あそばすように、いつまでも花の枝を見ておいでになった。枝ぶりもよく花卉の大きさもすぐれた美しい梅であった。

「色はむろん紅梅がはなやかでよいが、香は白梅に劣るとされているのだが、これは両方とも備わっているね」

宮がことにお好みになる花であったから、差し上げがいのあるほど大事にあそばすのであった。

「今夜は御所に宿直とのいをするのだらう。このまま私の所とにいるがいよ」

こうお言いになつてお放しにならぬために、若君は東宮へ伺うこともできずに兵部卿の宮のお曹司ぞうしへ泊まることにした。

花も羞しゆう恥うちを感じるであらうと思われるに、おいの高い宮のおそば近くに寝やすんでいることを、若君は子供心に非常にうれしく思つていた。

「この花の持ち主の方はなぜ東宮へお上がりにならなかつたのかね」

「よく存じませんけれど、宮仕えよりも普通の結婚を父母は望んでいるのではございませんでしようか」

などと若君はお答えしていた。大納言の希望は自身の娘のほうであることも宮は他から聞き込んでおいでになるのであるが、憧こがれ憬をお持ちになるのは東の女王によおうのほうであったから、花の返事も明瞭めいりょうにあそばしたくないお気持ちがあつて、翌朝若君の帰る時に、感激のないただ事のようにして、

花の香に誘はれぬべき身なりせば花のたよりを過ぐさましやは

こんな歌をおことづてになるのであつた。

「大人おとななどには話さないで、そつと女王さんに私の言ったことを

取り次ぐのだよ」

と返す返す宮は仰せられた。若君も東の姉君を他の姉よりも愛しているのであって、かえって他の姉たちは顔も見せるほどにして近づかせ、普通の家の兄弟と変わらないのであるが、重々しい上品さのある女王を、幸福の多い、はなやかな境遇に置いてみると常に望んでいるのに、太子の後宮へはいった姉が両親からはなばなく扱われるのを見て、それも姉なのであるからよいわけであつても、不満足な気がするため、せめてこの宮を東の女王おつとの良人おつとにしてみたいと心がけている時に、うれしい花の使いをすることになったのである。

昨日は大納言から歌をお贈りしたのであるから、まず宮のお返



事を若君は父に見せた。

「おじらしになる歌だね。あまりに多情な御生活をされることに感心しないでいることをお聞きになって、左大臣や自分などに対しては慎しみ深くお見せになるのがおかしい。浮気男うわきにおなりになるのもやむをえないほどきれいに生まれておいでになる方が、まじめ顔をされてはかえってお価値ねうちも下がるだろうが」

などと陰かげぐち口をしながら、今日も御所へ出す若君にまた、

本もとつ香におほの匂におほへる君が袖そでなれば花もえならぬ名をや散らさん

風流狂のようでございますがお許しください。

こんなふうな消息をあかずに書いて持たせてあげた。遊びの気分でなくまじめに娘の所へ自分を誘おうとするのであろうかと、さすがに宮は興奮をお感じになった。

花の香を匂はす宿に尋め行かば色に愛づとや人の咎めん

と、まだ受け入れがたい気持ちを書いてお返しになったのを、大納言は飽き足らず思った。

真木柱夫人が帰つて来て、御所であつた話をした時に、

「若君がいつかお上のお宿直をいたしまして、翌朝東宮様へまいりました時に、よい香がついておりましたのを、だれもそんなこ

とを気づかずにおりましたのに東宮様はすぐお悟りになりました、兵部卿の宮の所へ伺っていたのだらう、だから冷淡にして私の所へは来なかつたのだと冗談じょうだんをおつしやいまして、おかしゅうございました。宮様からお手紙でもまいったのでございますか」  
こんなことを良人に問うた。

「そう。梅の花がお好きな方だから、あちらの座敷の前の紅梅が盛りで、あまりきれいだつたから折つて差し上げたのです。宮のお移り香は實際馥郁ふくいくたるものだね。後宮の方たちだつてああも巧妙に焚たきしめることはできないらしいがね。源中納言のはそうした人工的の香ではなくて、自身の持っている芳香が高いのですよ。どんなすぐれた前生の因縁で生まれた人なのだらう。同じ花

だがどんな根があつて高い香の花は咲くのかと思うと梅にも敬意を表したくなるからね。梅はにおうみや匂宮がお好みになる花にできていますね」

花の話からもまた兵部卿の宮のことを言う大納言であつた。

東の女王は細かい感情ももう皆備わる妙齡になつてゐるのであるから、匂宮がお寄せになる好意を気づかないのではないが、結婚をして世間並みな生活をする事などは断念してゐた。世間もまのあたり勢力のある父の子である方を好都合であるように思うのか、西の姫君のほうへは求婚者が次ぎ次ぎ現われてきて、はなやかな空気もそこでは作られるが、こちらはかげ蔭の国のように引つ込んで暮らしている様子を、匂宮はお聞きになつて、御自身の趣

味にかなった相手とますますお思いになることになり、始終大納言家の若君をお呼び寄せになつては、そつと手紙をおことづつてになるのを、大納言はこの宮を二女の婿に擬して、お申し込みさえあればと用意もしていることで夫人は心苦しく思つて、

「行き違いになつて、そんな気持ちなどをまったく持つていない人のほうへいろいろと好意を寄せた手紙をくだすつてもむだなことなのに」

こんなことを言うことがあつた。少しのお返事すらも女王のせぬことでいよいよ宮はおいらだちになつて、負けたくないお気持ちも出て、より多く熱の加わつた手紙を書いてお送りになるのであつた。

良人<sup>おつと</sup>を失望させてもしかたがない、婿にしてみたい気のする輝かしい未来も予想される方であると思つて、夫人は時々どうしようかという気になることもあるのであるが、あまり多情で、恋人を多くお持ちになり、八の宮の姫君にも執心されてたびたび宇治にまでお出かけになることも噂<sup>うわさ</sup>されるのであるから、女王のために頼もしい良人になつていただけるとは思われぬ、不幸な境遇の娘であるから、もし結婚をさせることになれば万全の縁でなければ人笑われになるばかりであると、だいたいの心はお断わりすることにきめてしまつて、御身分柄のもつたいなさに、母として夫人が時々お返事を出したりだけはしていた。







# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2004年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

紅梅

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>